

2025年度

J C r W 小 論 文

注 意

1. 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒のシャープペンシルで記入することになっています。鉛筆またはシャープペンシル・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
3. この問題冊子は 4 頁までとなっています。試験開始後、ただちに頁数を確認してください。
4. 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認してください。
5. 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
6. 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
7. この問題冊子とメモ用紙は持ち帰ってください。

＜生きがい＞とは何かについて、すきやばし次郎店主のエピソードを参考にしながら説明しなさい。その上で、スポーツにおいて生きがいを見つけることの意義について具体例を挙げながら、あなたの考えを800字前後で論じなさい。

2014年春、バラク・オバマ米大統領（当時）が日本を公式訪問したとき、日本政府関係者は、日本国首相との夕食会には、どんな場所を選ぶべきかと頭を悩ませた。この夕食会は、次の日から始まる公式行事に先んじるもので、正式には皇居で天皇皇后両陛下が晩餐会を催すことになっていたため、あくまでも非公式に行わなければならなかった。

どのレストランを選ぶべきかという、この一事に一体どれくらいの配慮が必要だったかを想像してみて欲しい。最終的に会場は世界で最も有名で素晴らしい寿司屋の一つ「すきやばし次郎」になったが、その選択にはみんなが納得したことだろう。なるほど、オバマ大統領が店を出てきたときの笑顔は、そこでの食事がどれほど楽しいものであったか、一目瞭然に語っていた。報道によれば、オバマ大統領は、今まで食べた中で一番の寿司だったと述べたという。これは、オバマ大統領がハワイという、寿司を含め日本文化がかなり受け入れられた土地で育ち、また、一流レストランでの食事を数多く経験していることを思い合わせると、この上ない賛辞である。

「すきやばし次郎」は、ミシュラン三つ星の料理人の中で世界最高齢、現在（2022年4月）96歳の小野二郎氏が率いる店である。「すきやばし次郎」は、2007年にミシュランガイド東京編がはじめて出版される前から既に日本人の美食家の間では有名だったが、これが出版されたことによって、世界的美食地図上に位置づけられることになった。

彼の寿司は、神秘的と言っているほどのオーラをまとっているが、小野はただ現実に対して、臨機応変に工夫しているだけである。例えば、彼は、一年を通して新鮮な状態でイクラを提供するための特別な手法を開発した。これは日本最高ランクの寿司屋の中で長年に亘って培われてきたプロの常識には反するものだった。——鮭が産卵のために川を果敢に遡上する秋がイクラの旬であり、イクラはその時期だけ出すべきものだったのである。彼はまた、カツオを稲藁で燻して特別な風味をつけて寿司種にするという、新しい手法も発明した。彼が熱烈な眼差しを向けて待っている客の前に寿司を置くタイミングは計算されつくしている。口の中に入ったそのときに寿司が一番おいしくなるように、魚の温度など全てが考えられているので、客は寿司が目の前に置かれたらすぐさま口の中に入れるのが礼儀である。実際、「すきやばし次郎」での食事は、カウンター越しに威厳に満ちた高名な振付師による精巧なバレエを体験することに等しい（ところで、彼の顔は、時折急に緩んで微笑みを見せることがあるのだが、それが見られるかどうかは運次第だ）。

あなたは、小野が驚くべき成功をおさめたのは、彼に非凡な才能と、すさまじい意志の強さと、長年のきつい仕事を乗り越える血のにじむような不屈の努力とがあったからだ、と思うことだろう。そのうえ料理技術を飽くことなく追求して、最も質の高い寿司を提供しようとしてきたからだ、と。言うまでもなく、小野はこのすべてをやってきた。

しかしながら、成功の理由はそれだけではない。多分他の何より、小野が〈生きがい〉を持っていることによるのだ。この〈生きがい〉という最も日本的な精神性を磨いていったからこそ、彼のプロとしての、また私人としての、輝かしい成功がある、と言っていいのである。

〈生きがい〉とは、「生きる喜び」、「人生の意味」を指す日本語である。この言葉は確かに「生きる」と、「値うち」を指す「甲斐」から成っている。

日本語では、〈生きがい〉は様々な文脈で使われている。大きな目的や業績だけでなく、日々の小さなことにも用いられる。日常生活の中で極めてさりげなく、特別な意味を持っていることなどまったく意識せず人々が使うような、当たり前の言葉なのである。最も重要なのは、〈生きがい〉は、あなたが自分の専門領域で必ずしも成功をおさめていなくても、使うことのできる言葉であることだ。この意味で、これは、生き方の多様性を賛美している、とても民主的な概念なのである。〈生きがい〉を持つことで、成功につながることはあるのは事実だが、成功は、〈生きがい〉を持つための必要条件ではない。〈生きがい〉はどんな人にも開かれている。

小野二郎のような、成功している寿司屋のオーナーにとって、アメリカ合衆国の大統領から賛辞を受けることは、〈生きがい〉の一つの源になることだろう。世界最高齢のミシュラン三つ星料理人として認められることは、〈生きがい〉の一つとして素敵なことには違いない。しかしながら、〈生きがい〉は、世界的な認知だとか賞賛だとかの領域に限られない。おそらく小野は微笑みを浮かべて待っている客にどう一番良いマグロを出すかに、シンプルに〈生きがい〉を見出しているのだろう。また、市場に魚を買いつけに行こうと早起きして外に出た、その早朝の空気の心地よい冷たさにも、彼は〈生きがい〉を感じていることだろう。小野は、毎日のはじまりに啜る一杯のコーヒーに、あるいは、東京の真ん中にある彼の店まで歩いていくときに浴びる木漏れ日に、〈生きがい〉を感じているかもしれない。

小野はかつて、寿司を握りながら死にたい、と言っていた。寿司を握るのには、事実、単調で、時間のかかるたくさんの小さな工程が必要になるのだが、確かに、それが彼に深い〈生きがい〉の感覚を与えている。例えば、タコを柔らかく、味わい深くするために、

小野はその軟体動物を一時間も「マッサージ」しなければならない。寿司の王様とも言われる小さな光り物、コハダの下拵えは鱗、内臓を取り除くのに細心の注意が必要であり、かつ塩と酢で、ちょうど良い加減に酢メしなければならない。「たぶん自分が握る最後の寿司はコハダだろう」と彼は言っていた。

〈生きがい〉は些細な物事に宿る。朝の空気、一杯のコーヒー、太陽の光、タコのマッサージ、アメリカ大統領の賛辞、これらはすべて対等の関係にある。あらゆる種類の豊かさを認識できる人だけが、本当に〈生きがい〉というものを理解し、楽しむことができるのだ。

これは〈生きがい〉の重要な教えである。その人の人間としての価値や自信が、おもに成功によって決定される世界では、多くの人が不必要なプレッシャーに押しつぶされそうになっている。もしかすると、あなたは例えば、昇進したとか、お金が儲かったとか、具体的に何か達成してはじめて、あなたの持っている価値が正しく立派なものだと証明できる、と感じているかもしれない。

だとしたら、安心しよう！ そんな風に自分自身を証明しなくても、生きる価値を与えてくれる〈生きがい〉を持つことはできる。それは簡単にできるというわけではない。私は、〈生きがい〉が根づいた国に生まれ育ったのにもかかわらず、この事実を時折自分自身に言い聞かせなければならない。しかし、できることなのだ。

（茂木健一郎著、恩蔵絢子訳『生きがい—世界が驚く日本人の幸せの秘訣—』による）